2019 年度外国語学部 FD 活動報告

（英米学科、スペイン・ラテンアメリカ学科、フランス学科、ドイツ学科、アジア学科）

外国語学部では FD 活動の取り組みとして、2019 年度では、FD 研修会を 2 回実施した。

7 月 24 日に開催された「WebClass の諸機能とその活用法」と題した FD 研修会では、学部構成員の授業運営上のスキル向上をめざし、本学部英米学科に所属する川島正樹教授を講師に迎え、ピアサポート型講習会を行った。参加者は 34 名であった。

2020 年 1 月 20 日に開催された「アクティブ・ラーニングとしての国際サービス・ラーニング－地球市民を育む ICU の教育実践」と題した FD 研修会では、国際基督教大学でサービス・ラーニング担当講師を長年務める黒沼敦子先生を迎えて、近年多くの大学で取り組まれているサービス・ラーニングが、異文化理解や多文化共生を掲げる外国語学部の教育プログラムにどのように組み込めるかについてお話し頂いた。参加者は 15 名であった。

例年開催されていた学部自己点検・評価委員会懇談会は新型コロナウイルスの影響のため、実施せずメールでの意見交換にとどめた。

各学科の FD 活動の詳細は、以下の通りである。

英米学科

【当初の計画】

1）学科が管理する LL 施設について、2020 年度に予定されている設備更新、ならびに施設の有効利用および今後の活用方法について検討する小委員会の活動を継続し、それぞれの方針を決定する。

2）学科内ミニ FD の実施も含めて、学科内 FD 活動をさらに充実させる。

3）学科内に専門の小委員会を組織し、学科カリキュラムと有機的に結び付けた視点から長期の派遣留学生数の維持および更なる増加を図る方策の検討を行う。

4）過年度と同様、学科内に専門の小委員会を組織し、学科必修科目の内容および評価の標準化の努力を継続する。

【報告】

1） LL 施設の有効利用ならびに今後の活用方法について小委員会で検討された意見を学科会議で議論した。COIL との連携も視野に入れて議論を重ねた他、TA の雇用、LL アシスタントの雇用についても議論した。（第 1 回学科会議、第 2 回学科会議、第 3 回学科会議、第 4 回学科会議、第 5 回学科会議、第 6 回学科会議、第 7 回学科会議、第 12 回学科会議、第 13 回学科会議、第 14 回学科会議、第 20 回学科会議）

また、CALL システムの活用のために、ミニ FD も行った。（第 5 回学科会議、第 10 回学科会議、第 14 回学科会議）

2） 2019 年度は、2018 年度に引き続き、海外フィールドワーク A（ハワイ大学)、海外フィールドワーク B (チチェスター大学)、オーラルインタープリテーションフェスティバルを予定通り行い、成功を収めることができた。これらの大型プロジェクトの準備を通して、学科構成員の学科運営面でのスキルアップを図ることができたという意味で、非常に有効な FD 活動を行うことができたと考えている。

3） 海外留学強化については、様々な機会を通して留学の魅力ならびに有効性について強調した他、海外フィールドワーク実施の効果も期待されたが、2019 年度は 2018 年度に比べて長期の派遣留学生数はかなり減少した。具体的には 2019 年度の英米学科派遣留学生数は、2019 年春派遣が交換 7 名、認定 3 名の合計 10 名、2019 年秋派遣が交換 26 名、認定 0 名の合計 26 名、2020 年春派遣が交換 3 名、認定 1 名の合計 4 名、総計 40 名（2018 年度は 67 名）であった。2020 年度については、新型コロナウイルスの世界的感染拡大により、現時点で留学すること自体が不可能になっており、海外留学に力を入れてきた英米学科としては、非常に難しい局面を迎えている。

4） 学科必修科目の内容および評価の標準化の努力の継続については、2019 年度もコーディネーターを中心とする学科内の小委員会で検討した。Academic English B の内容充実に向けて、学科独自の共通テキストの作成の準備を進めるとともに、第 3 クォーターには、Academic English B の 3 つのクラスでディキンソン大学およびジョージタウン大学との COIL による連携授業に挑戦し、国際連携のための実際の活動を通して、学科構成員のスキルアップを行うことができた。

スペイン・ラテンアメリカ学科

1） 2019 年度は、人事の異動はなく、各教員とも基本的には担当の業務に支障なくあたることができた。日常の業務における疑問・課題があった場合は、学科会議やふだんの意見交換等を通じ、忌憚なく問題にあたることができた。

2） 学科科目の運営については、例年通り、学科長・学科内教務担当者・スペイン語教育コーディネーターの三者を中心に、各種調整にあたった。具体的には、学科必修スペイン語科目は、学科内教務担当者とスペイン語教育コーディネーターが中心となり、非常勤講師を含むすべてのスペイン語科目担当教員との連携の下、年間の授業計画を策定し、実行した。特に、スペイン語教育コーディネーターは、非常勤講師との面談の機会を持ち、さまざまな意見をくみ上げ、それを授業計画に反映させるようにした。スペイン語科目以外の学科科目については、各科目担当者から問い合わせ等あった場合、学科長および学科内教務担当者が、スムーズな授業運営に向けて適宜対応した。

3） 近年継続して教員交流を進めてきた輔仁大学（台湾）スペイン語学科とは、これまで同様良好な関係を保ち、本年も教員 1 名を招聘し、本学学生に対してスペイン語文法およびにスペイン語の学び方に関する講演をスペイン語で行っていただいた。また、学科教員とは、輔仁大学におけるスペイン語教育に関するお話をいただき、意見交換の場を設

けた。例年、3 月に本学科から補仁大学へ教員を派遣するが、2019 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、残念ながら中止となった。

4) 学科主催あるいはラテンアメリカ研究センターとの共催の講演会・研究会も頻繁に行われ、海外・国内の研究者をお招きし、スペイン語教育やスペイン史、ラテンアメリカの古代文明等、さまざまなテーマについて知る機会が提供された。
5) 今年度最終年度を迎えた大学の世界展開力強化事業プログラム（LAP）を通じた上智大学・上智大学短期大学部との連携は、例年通り活発に行われ、「海外フィールドワーク B」（コロンビア）や「ペルースタディツアー」の引率業務に学科教員が参加するとともに、2019 年 12 月に上智大学で行われた同プログラムの総括シンポジウムにも出席した。これらの活動を通じ、学外機関との交流のさらなる活性化が見られた。
6) 1 年次生対象の学科必修科目「スペイン・ラテンアメリカの文化 A/B」（学科教員によるオムニバス形式）は、各科目のコーディネーターを中心に、科目テーマの検討、教員間との事前調整、定期試験問題作成方法見直しや成績評価決定のための調整が綿密に行われた。
7) オープンキャンパスでは、「スペイン・ラテンアメリカ学科教員によるラテンアメリカ音楽ミニライブ」を昨年に続いて実施し、約 80 名の参加者があるなど盛況であった。この他、4 つの模擬授業を提供し、本学科が対象とする地域の言語や文化、事情等の紹介を通して、学科の情報宣伝活動を行った。

フランス学科

1) 2019 年度はクォーター制導入 3 年目に当たるため、学科内において定期的にミーティングを開催し、各専攻のカリキュラムに適した授業内容を配置するとともに、科目登録・授業運営等に問題がないか検証した。また、前年度に引き続きフランス語科目担当の非常勤教員を集めて教科書会議を開催し、授業方法について事前の打ち合わせを行った。
2) 履修ガイダンスや学び方講座の開催、オフィスアワーの設置、学科ウェブサイトの充実などを通じて学生の履修指導、留学支援、学習支援を行った。
3) 新カリキュラムの海外フィールドワークが 2018 年度より発足し、リヨンカトリック大学とオルレアン大学での短期語学研修を行った。学科教員 1 名が同行し、予定通り大過なく終了した。
4) フランス語教育促進のための学生によるフランス語劇は 12 月に上演を行った。また、京都外国語大学で開催された全日本学生フランス語プレゼンテーション大会に学科学生が参加した。
5) フランス語教育の効果を測定し、その結果をさらに教育に活かすため、実用フランス語技能検定や TCF などの外部語学試験の団体受験を行った。
6) 学科の Facebook の更新、オープンキャンパスや高校への出張授業などにおいて広報活動の活性化にも努めた。

7） フランス語圏に関する専門的知識を有する専門家を招いての学科主催による講演会は、6 月イヴァン・ジャブロンカ（パリ第 13 大学教授）、10 月アントワーヌ・リルティ（EHSS 教授）、12 月ジャンイヴ・ゲラン（パリ第三大学名誉教授）と 3 回開催した。

ドイツ学科

1）2019 年、クォーター制は 3 年目を迎え、学科でも議論が行われた。その中でメリット、デメリットなどが話し合われ、これからのカリキュラム編成に生かされることになった。
2）ドイツ語教育のクオリティーおよび教員の資質向上のため、主に外国語科目を担当する教員を中心として、定期的に授業の進捗などについて情報共有、意見交換を行うことで、教員間の密接な連携を図った。その連携には学科専任教員だけでなく、外国語教育センター所属の教員も加わり、学生の学習状況全体に目配りが届くよう努めた。
3）ドイツ学科主催講演会として、アンドレアス・ヴィストフ（中国人民大学准教授）による「コンクリート・ポエトリーのドイツ語授業への導入」と、ベアーテ・フォン・デア・オステン（駐日ドイツ連邦共和国大使館参事官、通訳・翻訳部長）による「日独外交通訳の現場から」を開催した。両氏とも国際的に活躍されており、学生はもとより教員にとっても新しい知見を得る重要な機会となった。
4）学科ホームページを 2019 年 7 月下旬に開設し、学科独自の情報発信に努めた。
5）学生の勉学の支援、成果発表の場として本学科が他の教育機関等と連携して行っている一連の催しは、例年同様、2019 年度も盛況を呈した。6 月に開かれた「南山大学ドイツ語弁論大会」では、本学の学生が 2 位、「南山大学ドイツ語オーラル・インタープリテーション大会」では、1 位、4 位に入賞するなど活躍した。学内に留まらず埼玉の駿河台大学で開催された「ドイツ語暗誦大会」でも本学科学生が 2 位に入賞した。11 月に行われた「学生ドイツ語劇上演会」（学生 20 名＋OB）も 150 名近くの来場者があり、盛況であった。また、海外フィールドワーク期間中、ヨーロッパ言語共通参照枠に準拠したドイツ語能力検定試験(A2/B1）を実施し、A2 は 39 名、B1 は 7 名が合格した。また、秋に大学で開催された B1 の試験では 2 名の合格者があった。この他、12 月に開催された第 19 回名古屋圏国公私立大学インターゼミナールに 10 名が参加した。各自ドイツ・EU 経済に関する卒論研究に向けた内容を発表し、それについて他大学学生と活発な議論を行った。

アジア学科

1）クォーター制導入に伴う新カリキュラムに配置した授業、とりわけ外国語科目と演習科目について、前年度から継続して学科会議や担当者ミーティングの場でその運用状況を報告するとともに、評価できる点と改善すべき点について意見交換をおこなった。
2）Q2 に実施した「海外フィールドワーク A」について、学科会議の場で、それぞれのプログラムの実施状況の報告、評価できる点と改善すべき点の検討をおこなった。なお Q4

に実施した同 B については 20 年度に入ってただちに点検・評価をおこなう。

3）学科教員間および学科教員と非常勤講師の間で連携をとって、授業における学生の様子を随時把握しながら、オフィスアワーを活用するなどして必要に応じて学生指導をおこなった。

4）学科作成ホームページに、今年度も幾つかの学科科目を紹介する欄を追加した。そこに掲載するために受講生に依頼した紹介文をもとに、当該科目に対する学生の評価を確認した。

5）インドネシア語スピーチコンテストを 11 月に開催した。本学科生 2 名がスピーチの部で入賞するなど、インドネシア語教育の成果を示してくれた。

6）国費留学希望者に対する留学説明会を中国・台湾、インドネシアそれぞれについて実施し、出願予定者に対しては研究計画作成等についての個別指導もおこなった。

7）在学生の団体である FA.com の協力を得ながら、新入生ガイダンス（4 月）やオリエンテーション（5 月）など新入生の活性化を目指す活動を従前通りおこなった。

8）キャリア教育の一環として、1 年生を対象とする学び方講座を Q1 に、キャリア支援室利用講習を Q4 に実施するとともに、2 年生を対象とするキャリア入門講座を Q3 に実施した。

以上